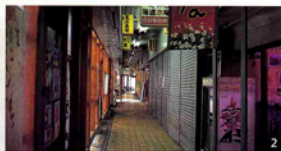


街づくりにおける、学生の取り組み——神戸と山形のプロジェクト事例から

Student initiatives in city development——Projects in Kobe and Yamagata



住みコミュニケーションプロジェクト
<http://www.suimicomi.com>

神戸市兵庫区にある「稲荷市場」は、1970年代の最盛期には約90店舗が軒を連ねた商店街だ。しかし、町の基幹産業であった造船業の衰退とともに客足が減り、さらに95年の震災で多くの建物が倒壊。その後の長引く不況、近隣の再開発、経営者の高齢化が追い打ちをかけ、現在は20数店が営業するのみだ。そんな街の活性化を目指して、神戸芸術工科大学の学生らが試みるのが「住みコミュニケーションプロジェクト」。街の調査・研究を行う先輩らのアートイベント（まちのリズム場所のリズム）への参加をきっかけに、03年から始まった。学生が家主から借り受けた空き店舗を改修して街に住み込み、地域活性化の一端を担う計画である。近隣の職人ら

の協力を得て改装した最初の建物が、プロジェクトの事務局兼住居となった。昨年は商店街全体を使ったアートイベントを企画・運営。地元企業からの協力金150万円を元手に、2軒目以降の改修も進んでいる。

一方、山形市の東北芸術工科大学の学生らが中心となって取り組むのが「ヤマガタ蔵プロジェクト」だ。山形の中心市街地には、約150棟の蔵が点在する。しかし、福島・喜多方などに見られる商店と一体化した「店蔵」は少なく、倉庫用途の「荷蔵」と呼ぶ種類が大半だという。通りに面さない蔵も多く、観光資源として生かされる例は少なかった。区画整理も影響して次々と蔵が取り壊されるなか、逆に、街並みの変化に呼応し

てそれらを改修し、町の共有資源として活用を図る構想が生まれた。03年には空き蔵の1つを学生らが改修、市民の集うカフェに転用し、ライブやシンポジウム、展覧会場として用いた。昨夏には他の4つの蔵を交えた「蔵ネット」を組織、17日間の合同イベントでワークショップや落語会などのさまざまな催しを行った。今年度は活動への理解の促進を目指し、市民を対象にした市内の蔵巡りツアーや、蔵の所有者に呼びかけて「蔵主会議」を企画する。

2つに共通するのは、学生たちの好奇心と行動力。それらが確かに引き継がれ、継続的な活動となるのを期待したい。(文/編集部・神吉弘邦)

1. 活動拠点の名は、地下室を持つことから「チカちゃんハウス」。以前は築50年の韓国料理店だった。
1. A 50-year-old building was renovated and used as the project's office as well as a residence. Renovations are underway for other buildings too.
2. シャッターを下ろした店も多い、稲荷市場商店街。
2. The Inari Ichiba commercial district where many shops have drawn their shutters.
3. 神戸芸術工科大学大学院の三宗 匠代表は、神戸市内の商店街で育った。震災後、ニュータウンやマンションへ引っ越した者も多いという。当時中学生だった彼の家庭もその1つ。
3. Kobe Design University's graduate school representative Takumi Mitsumune. Raised in Kobe's commercial area, he moved to New Town after the earthquake.